

ドイツにおけるエティンガー失言問題

——「過去の克服」をめぐる政治力学——

近 藤 潤 三

はじめに

1. 失言問題の発端と概略
2. 批判の噴出とエティンガーの退却
3. エティンガーの謝罪表明
4. 再起の模索
5. 政治過程の注目点
6. 失言問題の顛末とプチ・ナショナリズム — 結びに代えて

付記

はじめに

2007年7月、原爆投下をめぐる失言の責任をとり、初代防衛大臣の久間章生氏が辞任した。失言や放言による閣僚の引責辞任はわが国では珍しくないが、それより少し前の同年4月に、日本と同じ敗戦国であるドイツでも主要な政治家の失言が問題になり、一時的ではあれその帰趨がかなりの注目を集めた。それは、バーデン＝ヴュルテンベルク州首相ギュンター・エティンガー（CDU）の戦争認識に関わるものである。いずれも発言が失言として認知され、政治問題化した点で共通しており、一部に公式的で建前に化している面が指摘されるにせよ、歴史認識に関して一定のコンセンサスが社会の中に存在していることを浮かび上がらせた。同時にそうしたコンセンサスを背景にして、なによりもマスメディアが大々的に報道し、メディアを通じた責任追及が問題をクローズアップして窮地に追い込んだ点でも類似している。

けれども、無論、相違点もある。第一の決定的な相違は、世論の反撥を受け

て久間氏は辞任したのに、野党政治家や主要な社会団体から辞任要求を突きつけられたにもかかわらず、エティンガーは辞任しなかったことである。久間氏にはメディアの前で真意を説明する機会すらほとんど与えられなかったように見えるが、これに反し、エティンガーの釈明と謝罪はそれなりに評価されて受け入れられたからである。

第二は、国務大臣と州首相という地位の違いである。前者の場合は任命権者たる総理大臣に責任が波及し、本人が辞任を拒否すれば更迭できるが、後者は独立性が強い。このため、失言問題への対処の仕方が違ってくる。エティンガーの場合、解任の可能性はないから、注目されるのは助言や圧力である。そして今回の事件で圧力によって死活を制したといえるのは、連邦宰相でCDUの党首でもあるメルケルだった。一方、久間氏の場合は対処を誤れば首相に責任が及ぶことや、紛糾が長引いたら間近に迫った国政選挙に影響するという政治的計算が働いたと考えるのが自然であろう。

第三の相違は失言問題の文脈である。わが国では植民地支配や戦争に関する失言や放言がたびたび見られるのに対し、ドイツではナチズム、ホロコースト、戦争に関わる失言問題は少ないという事情がある。それは、徹底性に関する評価は別にして、ドイツでは過去の克服が国民的な共通課題とされ、努力が重ねられてきたことによって説明されるであろう。戦後復興から高度経済成長の時期までは西ドイツでも冷戦の影響を受けて過去の問題は回避されがちだったが、1960年代に始まる政治文化の変容を背景に正面からの取り組みが進んだ結果、上記の諸テーマでの失言は政治家失格と見做され、致命傷となるに至った。ところが今回の事件では一種の逆転現象が起き、久間氏は辞任の圧力に屈したのに反し、エティンガーはそれを撥ね返し、ポストにとどまったところに特徴があり、またそこにエティンガー失言問題を考察する意義の一つがあるといえよう。

ともあれ、簡単に点検しただけでも、ドイツとわが国ではこれらの共通点と相違点が浮かんでくる。以下ではそうした点を念頭に置きつつエティンガー失言問題の経緯を追跡し、政治過程を再構成するとともに、そこに見出される注

目点などについて考えてみよう。

1. 失言問題の発端と概略

南西ドイツの大学都市フライブルクのミュンスターで、2007年4月11日にある人物の追悼式典が執り行われた。それは4月1日に他界したフィルビンガーというかつてバーデン＝ヴュルテンベルク州の首相を務めた政治家の死を悼むためである。会場には遺族と関係者をはじめ、同州の政界・経済界などを代表する700人が参集した。この場で追悼演説を行ったのが現職の州首相エティンガーであり、その中に問題表現が含まれていたのである。

追悼演説の慣例に従い、エティンガーは死去したフィルビンガーの生涯をたどり、その功績を賞賛した。そして戦争期の彼についても賛辞を送ろうとして次のように述べたのである。「いくつかの追悼文に記されているのとは違い、次のことを確認することが肝要である。ハンス・フィルビンガーは決してナチではなかった。反対である。彼はナチ・レジームの敵対者だった。ただ彼は他の何百万の人々と同様にレジームの強制から殆ど逃れることができなかったのである。」¹¹

この演説が伝わると、直ちに激しい批判が噴き出した。そして瞬く間に集中砲火のような観さえ呈した。フィルビンガーには州首相を辞任した前歴があり、1978年の辞職の当時、『シュピーゲル』が政治スキャンダルとして特集を組んだことに示されているように、事件の経緯がよく記憶されていたからである。しかも、「ナチ・レジームの敵対者」というエティンガーによる評価は、多くの人が抱いているナチ協力者というフィルビンガー像を真っ向から否定するものであり、生命の危険を顧みず抵抗した本当の敵対者の列にフィルビンガーを加えて彼らの名誉を冒瀆するものだったので、なおさら批判が過熱せざるをえなかったといえよう。

エティンガーに対する批判とそれへの応酬を見る前に、ここで簡単にフィルビンガーの戦時期の行動と州首相辞職までについて触れておこう。

1913年に生まれたフィルビンガーは、ナチ政権成立後に国民社会主義ドイツ学生連盟に加入し、1937年にはナチ党に入党した。1939年にフライブルク大学で法学博士の学位を取得して同大学の助手になった後、1940年に海軍に召集された。そして3年間兵士として過ごしてから1943年に海軍の法務官に就任した。またこの間に将校に昇進した。敗色の濃くなった1945年1月から5月の降伏までドイツ占領下のオスロの軍事法廷で裁判官の役割を果たし、降伏後は短期間イギリス軍の捕虜収容所ですごした後、1946年にフライブルク大学に復帰した。1951年にCDUに入党し、53年にはフライブルクの市参事会員に選出された。1960年には後の連邦宰相で当時バーデン＝ヴュルテンベルク州首相だったキーゼンガーの下で内務大臣に就任し、彼が大連立政権を率いるためにボンに移ったのを受けて1966年に同州の首相についたが、78年に辞職のやむなきに至った⁴¹⁾。

フィルビンガーが辞職に追い込まれたのは、1978年2月に『ツァイト』紙上でR.ホッフホフトが戦時期の彼の行動を暴露したためだった。戦時下の軍事法廷で戦争を忌避する兵士に死刑判決が下されたが、それにフィルビンガーが関与していたというのである。そればかりか、ヒトラーの海軍裁判官はヒトラーの死後、イギリス軍の捕虜収容所でさえナチの法律に従って兵士を処断した「恐るべき法律家」であり、彼が「自由でいられるのはひとえに彼を知る者たちの沈黙のおかげである」、こうホッフホフトは告発したのである⁴²⁾。

ここで軍事法廷に触れておけば、戦時期に欠席裁判を含め3万人の国防軍兵士に軍事法廷で死刑判決が言い渡され、そのうちの1万5千人に死刑が執行された。またそれ以外に脱走や敵前逃亡を図ってその場で処刑された兵士がいるが、実数は分かっていない。この数字を見る限り、軍事法廷が戦争を推進するナチ国家の不可欠の装置だったことは明白であろう。そうした事実を踏まえ、1995年に連邦最高裁判所がナチ期の軍事法廷を「テロ裁判」だったと認定している⁴³⁾。

それはともあれ、ホッフホフトの暴露に対して最初フィルビンガーは反論を展開した。まず彼は、上からの指示に従って行動しただけだという、しばしば見られる論理で批判をかわそうと試みた。しかし同時に、ただの一人の死刑に

も関与していないこと、それどころか、被告となった兵士を救おうとし、見込みがあれば厳罰を避けようと努めたし、その際に自分の生命をも危険にさらしたのだと主張した。こうして彼は世間に広がった「恐るべき法律家」という自分に対するレッテルは不当だと裁判所や州議会の場で訴えたのである。

ところが、フィルビンガーが公の席で無実を唱えた直後の7月に、彼の関与した死刑判決が少なくとも数件はあることが確認された。そのため、彼は防衛戦に転じ、戦争の「当時に法だったものは、今日でも不法ではありえない」と強弁して責任を回避しようとした。けれども、死刑への関与が確かめられたのに加え、公の場での弁明が虚偽だった以上、この論理が説得力を持つことはありえなかった。一例を挙げれば、今日のSPDの長老で、当時バーデン＝ヴュルテンベルク州のSPD委員長を務めていたE.エプラーは、彼を「自己批判の能力の欠如」した「病理的な良心の持ち主」だと酷評した⁶⁵。こうして信用を失ったフィルビンガーは、2月の暴露から半年が経過した8月になって辞任に追い込まれたのである⁶⁶。

因みに、フィルビンガーの後任として州首相に就任したのは、統一後のドイツで光学会社社長として経済界で活躍したL.シュベートだった。彼は一時、コール首相（当時）の対抗馬と目されるほどのCDUの実力者になったが、1990年に夢の船事件と呼ばれるスキャンダルで失脚した。ただシュベートの場合は戦時期の行動という重い問題ではなく、民間企業との癒着という腐敗が原因だったところが異なっている⁶⁷。

それはさておき、以上のような経緯を踏まえれば、「ナチ・レジームの敵対者」というフィルビンガー評価が如何に挑戦的だったかは説明を要しないであろう。演説の中でエティンガーは「人が命を奪われたようなフィルビンガーの判決はひとつもない」と強調し、さらにあからさまな免責のために「フィルビンガーには批判者が想像するような決定権も決定の自由もなかった」とも述べたが、もしこうした評価のとおり的人物だったら、フィルビンガーは辞職する必要は全くなかったのであり、悪いのは彼を攻撃したジャーナリズムやそれに加担した政治家たちということになるからである。R.ゾルトが指摘するように、

バーデン＝ヴュルテンベルク州の生え抜きの政治家であるエティンガーは、フィルビンガー事件の顛末をよく知っていたはずであり、また評価を逆転させたら自分に降りかかる政治的リスクも十分に理解していたはずであろう⁸⁴。実際、彼による評価は、生命の危険を賭して抵抗した本当の「ナチ・レジームの敵対者」とフィルビンガーを同列におくものだったから、抵抗運動で斃れた人々の名誉にも関わる大問題だった。この点を考慮すると、なぜエティンガーがそうした表現であえて世論を挑発するような拳に出たのかは不可解といわざるをえない。すぐに考えられるのは、故人を偲ぶ追悼演説という性質から、生前の功績を称え、すべてを美しく描こうとするリップ・サービスという動機が強かったことであろう。一般的に言って、弔辞ではそうした意図はしばしば透けて見えるものであり、汚点や失敗を素通りすることも許容範囲であれば問題は起こらない。けれども事柄はナチズムと戦争の認識に関わる重大な問題であり、ネガティブな評価を逆転して美化することは、過去の克服の努力が続けられてきたことを考えれば見過ごされるはずはなかったといわねばならない。

2. 批判の噴出とエティンガーの退却

事実、追悼演説が終わると批判が続出し、問題が一気に燃え上がった。そしてエティンガーは強気の対応から退却戦に転じ、遂には発言の事実上の撤回と謝罪に追い込まれることになった。

追悼演説の翌々日の『フィナンシャル・タイムズ・ドイツ』は主要な地方紙での演説に対する反響を掲載しているが、その中から2、3を紹介すれば、例えば『ハイルブロンナー・シュティンメ』はこう論評している。「フィルビンガーの個人史のエティンガーによる善意の描写で問題になるのは、彼に繰り返し見られる無思慮な表現ではない。問題なのは、フィルビンガーが海軍裁判官としての自分の行動の道徳的次元を全く認識していなかったことに一語も州首相が触れなかったことである。そうなったのは、エティンガーが必要な距離を取れなかったからである。彼は古い傷を再び引き裂いたのである。」また地元

の『シュトゥットガルト・ナハリヒテン』は政治的計算に目を向け、次のように書いている。「フィルビンガーは埋葬されたが、彼の名前は引き続き話題の種になるだろう。エティンガーはフィルビンガーのナチの過去に言及することによって幕を引こうとしたが、かえって新しい論争を引き起こした。どんな動機がこのように偏った立場をとらせたのだろうか。考えられるのは、CDUの右派に取り入ろうとし、だから演説草稿を訂正しようとしなかったということである。」『バーディッシェス・タークブラット』のコメントはもっと厳しい。「先輩のフィルビンガーのための追悼式典でエティンガーがしたことは、罰するに当たらない罪という項目に入れられることを遥かに超えている。バーデン＝ヴュルテンベルクの州首相はフライブルクのミュンスターで歴史のでっち上げをし、歴史的連関を美化しただけではない。彼は演説で嘘そのものを広めたのである。この死後の友情表現をみると、不適格さというよりは打算を考えざるをえないのである。」¹⁹

地方紙の紙面にはこのように辛辣な論評が掲げられたが、野党陣営の政治家からは、日常的な競争関係にあるだけに、これに劣らない強烈な批判がエティンガーに浴びせられたのは当然であろう。

南西ラジオ（SWR）の整理に従うと、追悼演説が行われた当日に最初に攻撃の矢を放ったのは、同盟90/緑の党の州代表D.モウラティディスだった。「エティンガーがナチ・レジームの協力者をナチの敵対者と呼んでドイツ史を輝かしくしているのは、私には全く理解できない」と彼は述べ、これにドイツ在住ユダヤ人中央評議会の副会長D.グラウマンが続いた。「エティンガーの表現を私はおぞましく感じる。それは誤った知らせを伝達し、フィルビンガーのような人物の責任を隠蔽してしまうのである。」²⁰

翌12日になると、批判の声は一気に多方面に広がった。

まずグラウマンの所属するドイツ在住ユダヤ人中央評議会議長C.クノープロツホが前面に登場した。彼女によれば、「フィルビンガーの生涯の周知の時期がエティンガーの演説では軽く扱われた。」しかし「彼がナチ・レジームの協力者だったのは自明」であり、これに照らすと、エティンガーの扱いは「事実を見く

びった愚劣以上のもの」である。「フィルビンガーをナチ・レジームの敵対者と呼ぶことは、生き残った者を傷つける危険な歴史的現実の倒錯」だからである。それゆえに「ドイツを政治的に代表する人々に対して我々はより多くの感情移入と歴史的責任意識を期待しなければならない。」このように厳しい断罪を下すと同時に、他面で彼女はエティンガーが行ったのは「典型的な埋葬演説」だったとも述べており、動機に一定の理解を示している。埋葬演説では「いわゆる良い側面にだけ」言及して故人の生涯を美化し、罪業や汚点を黙殺するのが慣例であり、エティンガーの場合にもそうした慣例にしたがいが、リップ・サービスの面があることは否定できないからである。このような見方に立ち、彼女が批判のトーンを抑制しているのは、後述する対応とも絡んで見過ごせない点であろう¹¹⁹。

これに比べると、同じユダヤ系の立場から非難を浴びせた著名な作家R.ジョルダーノの発言は峻烈だった。彼はエティンガーに辞任を迫った最初の批判者でもある。「このようなことを公言する者はドイツ連邦共和国の基本法の地盤の上に立てず、州首相のポストに適さない。もしCDUが民主的政党という信用を損ないたくないなら、党友に対してポストから身を退くように呼びかけるべきである」とジョルダーノは言い切っている¹²⁰。

ユダヤ系の歴史家で、ヨーロッパ・ユダヤ研究に取り組むモーゼス・メンデルスゾーン・センターの所長を務めるJ.シェップスも異口同音に退陣を迫った。「洞察力のない者の代表例であるフィルビンガーを抵抗運動家に作り変えることは本当に致命的である」とする一方で、彼は、「エティンガーにはこの問題で不法を働いたという意識を持つことは明らかに不可能」だと断定している。その上で、バーデン＝ヴュルテンベルク州のCDUに対し、「州の利益と自己自身の利益のためにエティンガーに辞任を勧告すべきである」と彼は主張している¹²¹。

ホロコーストの犠牲者の立場を代表するユダヤ人中央評議会やジョルダーノのようなユダヤ系の人々の発言は、ナチズム、戦争、民族差別のようなテーマに関してはドイツの世論で格別の重みがある。そのことは、中央評議会の歴代会長の中でとくにガリンスキーやブービスが世論形成に大きな影響力を行使してきた事実を見れば明白であろう。それだけに追悼演説後の早い段階でユダヤ系

の代表的な人物たちから指弾を浴びたのは、エティンガーにとって大きな重圧になったと推察される。

もとより、野党陣営もエティンガーの発言を放置しなかったのはいうまでもない。同じ12日に発言した同盟90/緑の党の全国代表C.ロートは、「フィルビンガーの生涯の一部に沈黙し、あるいは美化することによってエティンガーは極右の水車に水を注いでいる」と決め付け、「あとになってフィルビンガーを抵抗運動の闘士に加えることは成功しないだろう」と揶揄している。また同党所属でかつてバーデン＝ヴュルテンベルク州議会の院内総務を務め、現在は連邦議会院内総務の要職にあるF.クーンはエティンガーを「歴史の歪曲者」と呼び、かつての海軍裁判官としての判決と自己の行為に対するフィルビンガーの無反省を軽んじているから演説での表現を撤回すべきだと主張している⁹⁶。

一方、同じ野党のSPDからも批判の声が上がっている。バーデン＝ヴュルテンベルク州委員長U.フォークトによれば、「フィルビンガーは私には恐るべき法律家のままである」から、エティンガーがしているのは「歴史のでっち上げ」にほかならない。そして「CDUの次の世代がナチ時代の海軍裁判官に関する隠蔽を一緒に行うなら、それは緊張に満ちたドラマというしかない。」⁹⁷ これに比べると、同じSPDではあっても世代的にフィルビンガーに近い長老のE.エプラーの発言には陰影が見られた。彼によれば、エティンガーの表現は何もかも一括しているので間違っている。「当時の多くのドイツ人と同様に、フィルビンガーは多くの点でナチ・レジームと一体であり、いくつかの点で一体ではなかった。彼は恐らく本当のナチではなかっただろうが、しかし断固たる敵でもなかった。これは当時では普通のことだったのである。」エプラーはこう述べ、エティンガーを大上段に撥ね付けるのではなく、むしろ普通のドイツ人の責任にも言及しながら、穏やかな言い回しでフィルビンガーの美化をたしなめたのである⁹⁸。この言葉には、戦争末期に16歳でナチ党に入党した自分自身の過去に対する自省がこめられているのは明らかであろう⁹⁹。

もちろん、エティンガー擁護の声がなかったわけではない。しかし全体としてみれば、それはかなり少数だったことは否定できない。例えばバーデン＝ヴ

ユルテンベルク州議会CDU院内総務S.マプスは追悼演説を「バランスが取れ、フィルビンガーの全生涯に相応しい良い評価」だったと持ち上げたし、同州で大蔵大臣などを歴任したCDUの重鎮G.マイヤー＝フォアフェルダーも「エティンガーが語ったことは大胆であり、しかも正しい」と述べてエールを送った¹⁸。さらに同州のCDU幹事長シュトロープは「追悼演説は家族向けであって、歴史学のゼミナールではない」と議論の仕方に不満を示し、連邦議会の同州グループ代表ブルンフーバーに至っては「マイスター試験の模範」とまで呼んで演説を絶賛した¹⁹。けれども、これらの擁護はCDUの一部に限られており、『シュピーゲル』の伝えるところでは、CDUの内部にもむしろ不満や不快感が強かった²⁰。その意味で、急速に高まる批判の合唱の前ではエティンガー擁護はかき消されがちだったといえよう。

ところが、このように批判が続出しても、当初エティンガーは強気を崩さず、むしろ反撃する姿勢を見せた。彼は演説の翌日にラジオのインタビューに応じ、「私の演説は真剣に考えた公的なものであり、それが変わることはない」と述べて批判に耳を傾けることを拒否したのである。それだけではない。追悼演説に多くの支持と称賛が寄せられたことにも言及し、そのことが歴史のでっち上げではないことの何よりの証明だと強弁したのである。「私には追悼式典の翌日に赤と緑のキャンペーンを取り上げるつもりはなく、故人の尊厳を守ることが重要である」としながら、彼はこう続けている。追悼演説では故人の生涯と業績に立ち入ったが、「それを真面目に、品位を保ちながら行った。そうしたやり方以外のいずれもなんらかの思惑に出るものであり、人物自体には適さないのである。」²¹ この言葉にはSPDや同盟90/緑の党を中心とした批判が政治的意図から発しているという意味がこめられているのは容易に読み取れよう。

それだけに14日にエティンガーが公開状を公表し、「誤解」を招いたことを詫びたのは、ひとを驚かせた。この日から強気の姿勢は崩れ、守勢に転じたのである。彼はまず追悼演説の性質に関し、「演説はなによりも死去した者の家族と悲しむ身内・友人に向けられていた」と述べている。さらに「我々の文化圏では、故人の生涯の仕事と功績をポジティブに評価し、困難な時期についても沈黙せ

ず、しかし執拗に追及しないことは、追悼の際の発言の一般的で適切な慣習である」と記している²³。これはリップ・サービスが混じったことを正当化する論理であるが、美化には節度と限度があることへの言及は見られない。その意味では軽率さと無思慮に対する自覚が見られず、弁明として説得力に欠けるといわざるをえないであろう。

他方、エティンガーは、フィルビンガー評価によって「恐るべきナチ独裁を何らかの仕方で相対化しようとした」という批判は完全に的外れだと強調している。すなわち、「そんなことは私の内面的な心構えにそぐわないし、私の演説の意図にも合致しない」と記し、「そのような印象を自分は決して望んだのではなかった」と彼は明言している。しかしその一方で、「この点での誤解が生じた限りで、私はそれをはっきりとお詫びする」と述べており、発言を撤回しないまま、真意が伝わらなかったことに限って遺憾としたのである。

態度を軟化させたという変化が見られるにせよ、こうした内容の短い公開状での釈明では批判者を納得させるのに不十分だったのは指摘するまでもないであろう。なるほどCDUの幹事長R.ポファラは公開状を歓迎し、エティンガーがそれを提示したのは賢明で正しいと評価した。けれども、それと反対に批判者の側でSPD事務局長H.ハイルは、「ナチの犠牲者に対する尊重の念はエティンガーが発言を撤回することを要求する」と語って公開状を一蹴した。また同盟90/緑の党のクーンも公開状は歴史のでっち上げを片付けるのに不十分だとして受け入れなかったし、SPDのフォークトはエティンガーは公開状で事態をますます悪化させただけだと酷評したのである²⁴。実際、『シュピーゲル』が指摘したように、公開状には「多方面から求められたエティンガーの謝罪はなかった」のであり、そのために「怒りの波は静まるどころか、反対に謝罪と退陣への要求が改めて高まった」といえよう。事実、広く信頼されている連邦議会副議長W.ティールゼ（SPD）は、「エティンガーが謝罪の文章を書き込んでいたら、政治的・道徳的な高みを示したことだろう」と慨嘆したのである²⁵。

公開状を公表したにもかかわらず、反響が思わしくなく、事態の好転は期待できないと見ると、エティンガーは姿勢を一段と軟化させ、守りの体制を固め

ていく。15日にはSPD党首K.ベックが戦列に加わり、エティンガーは追悼演説で「許容される範囲を超え、右方向に道を誤った」と批判した。ベックによれば、公開状でむしろ明確になったのは、エティンガーが右のほうのスペクトルで人を引き寄せようと意識的に試みたことであり、そのために「彼が語ったことは、無責任、不適切であり、ドイツを傷つけ、民主主義の威信を損なった。」だから事態を收拾する責任は軽率な行動に出たエティンガーにあるが、同時に彼が收拾に動くようにCDUは仕向けなければならないと述べ、CDUの責任にも言及したのである⁴³。

こうしてメルケル大連立政権を支えるSPDの党首までが舞台に登場する一方、後述するように、メルケルも舞台裏で動いていたが、このように問題が連邦レベルに達し、圧力が高まっていたのに15日の時点ではエティンガーは公開状の線から一歩も退かなかった。同日のラジオのインタビューで、ナチ犠牲者とその家族の間で、自分が美化しようとしているという誤解が生じたなら遺憾であると繰り返すとともに、いかなる場合にもナチ・レジームの不法の時代を軽視するつもりはなく、自分を知る者は、私が歴史から学び、寛容と人権のために尽力していることを知っているはずだと守りを固めたのである。公開状を報じた『シュピーゲル』は見出しを「エティンガー、スキャンダル演説を相対化」としたが、その「相対化」は誤解の釈明までだった。そしてラジオでのインタビューを伝える『フランクフルター・アルゲマイネ』の記事では「エティンガー、一層の明確化を拒否」との見出しがつけられ、公開状での防衛線からエティンガーが一歩も譲る構えがないことを強調したのである。

3. エティンガーの謝罪表明

しかしながら、翌16日になると再び守勢にも変化が現れた。ひとつはマスメディアに向けた表明でさらに軟化し、遂には事実上の発言撤回に至ったことである。もうひとつは苦境の打開のため、ドイツ在住ユダヤ人中央評議会との釈明会談を模索したことである。

16日発売の『ビルト』で彼は、追悼演説で「私がフィルビンガーを抵抗運動家だったと宣言したかのように思われているのは心外」であり、「何百万もの人と同様にフィルビンガーがナチ・レジームに適応した」ことを自分は否定していないと弁明している。そしてこれを踏まえて、「迫害された人々、犠牲者たちを傷つける意図はなかった。そうした結果になったなら、心苦しい。そのことを私はお詫びする」と「誤解」を招いたことを改めて謝罪した⁹⁸。けれども、その一方で彼は、「人は若者だったときに残忍なシステムの下で犯した過ちについて生涯にわたって追及されるべきではないと思う」と述べ、「恐るべき法律家」というイメージでフィルビンガーの人生を一色に塗りつぶすのを疑問視している。少なくともここでは、「ナチ・レジームの敵対者」という演説でポジティブに描いたフィルビンガー像は抹消され、逆にナチ・レジームの協力者という前提に立って、人生の一時期の誤りの扱いに焦点が移されているのは間違いない。その意味で、明言は避けていても、一層の後退への道が暗黙裡に敷かれていたといつてよいであろう。

けれどもこの日の午前には、『ビルト』でのこうした発言と同じく、エティンガーは演説自体の修正や撤回は排除していた。「演説の作用が私には心苦しく、それを遺憾に思っていることはすでに明瞭に語ったと思うし、付け加えることは何もない。」「追悼に参集した人々の前での演説には、世間で考えられているとは異なることがこめられていた。だから今日なら私は違った表現を選ぶだろう。」こう述べて問題は誤解の余地があった点にあり、表現の不適切さに問題の核心があるという認識を改めて表明したのである⁹⁹。

ところが、この日の午後になると彼は大きく軌道修正した。それが明白になったのは、予定されていたローマ法皇誕生日祝賀のためのローマ訪問を突如取りやめ、急遽出席したベルリンでのCDU幹部会の場であった。エティンガーはそこで追悼演説が引き起こしたこの間の紛糾について釈明し、続けてこう述べたのである。「私がした表現に私はこだわらない。それゆえにこの場を借りて遺憾の意を明確に表明したい。」これに加え、さらに彼は「自分の表現に私は距離を置く。そしてこれですべてを語ったことになると思う」と告げ、失言問題

に幕を引こうとしたのである²⁸。

この言葉は様々な解釈が可能であり、前言を否定し、謝罪したとも理解できる。現に例えば『シュテルン』は「フィルビンガーに関する紛糾した表現をエティンガーは撤回した」と報じている²⁹。けれども、「距離を置く」ことは立場や見解を修正することは意味しても、必ずしも前言を取り下げることとは限らないし、ましてやその明確な否定とは決していえないであろう。むしろ、見方によっては、前言を撤回することを避けるためにあえて曖昧な言葉を選んだとも考えられよう³⁰。いずれにせよ、それまで拒否してきた撤回にも含みを残す表現をしたことは、重大な転換だったのは間違いない。またこれまでのように表現が招いた「誤解」についてではなく、発言自体に関して謝罪したことも確かであろう。これによって「徐々の退却」の末にエティンガーは最後の防衛拠点に立てこもったのであり、L.グレーフェンが指摘するように、「それ以外に彼にはもはや道が残されていない」ところまで追い詰められていたといえよう³¹。因みにグレーフェンは論説に「遅きに失した洞察」という見出しをつけているが、「距離を置く」意向の表明は誤りの自認や反省と同一ではなく、したがって「洞察」に基づいているとは限らないであろう。むしろそれは本心というよりは、自衛のための最後の便法だったと捉えるのが適切ではなかろうか。事実、「距離を置く」ことが表現撤回と謝罪だとすれば、どのようなフィルビンガー評価に変わったのかが問われなければならないが、この点には彼自身も周囲も口をつぐんだままだったのである。

それはともあれ、エティンガーの苦境を考慮に入れば、曖昧な釈明にもかかわらず、CDU幹部会がそれを了解したのは理解できよう。「幹部会は敬意をもってエティンガーの説明を了承した」と幹事長ポファラは言明している³²。彼によれば、幹部会でエティンガーは明確な立場を表明し、謝罪した。彼は自分の表現に距離を置き、ナチ被害者の感情を傷つけたかもしれないことを理解した。ユダヤ人中央評議会との対話を考慮しているのはそのためなのである。一方、ヘッセン州首相R.コッホはエティンガーの表現が党内に不安を引き起こしたことを認めた上で、「エティンガーの態度表明は語られねばならないこと

だった」から、それが公にされた以上、多くのことが論じられ書かれたが、それも終わりだとして問題が終息するとの見通しを公言した。さらに党首メルケルは、エティンガーの「謝罪は聞き届けられると私は期待する」と述べ、謝罪によってナチ被害者と迫害された者の側面が語りうるようになることを重視した。そして、この点が自分の心に触れることであり、「ドイツはその過去に対する責任を引き受ける場合にだけ未来を形成できる」から、エティンガーの謝罪は「重要かつ必要な一歩」だと前向きに評価したのである³⁵。

CDU以外の政党の政治家も一定の評価を与えた。その代表例はSPD党首ベックであり、「エティンガーは表現を完全に改めた。私はそれを尊重する」と述べている。同時に彼は、エティンガーがそうであるように、「キリスト教民主同盟・社会同盟の政治家は政治的スペクトルの右端のほうで有権者を釣り上げようと繰り返している」ことを問題視し、そうした行為は「ドイツと民主主義の威信を損なうことになる」と警告している。また同党事務局長ハイルは、最初に思慮を働かせたなら、「エティンガーは自分自身とわが国の民主主義を損なわなくても済んだであろう」とした上で、「彼が何度も確言した歴史修正主義的な表現を撤回するまでにかくも多くの圧力を必要としたことは、ぞっとする」と述べて、エティンガーの翻意が圧力の結果だったことを明言している。もちろん、SPDのなかにもこうした穏健な対応とは一線を画した意見も存在した。例えば連邦議会議員K.U.ベネターはエティンガーを州首相として不適格だとして辞任を求め、その理由として、最初にフィルビンガーをナチ・レジームの敵とし、次に3日間沈黙し、それから我々が彼を誤解したのだと語り、今は何について謝罪しているかを言わないまま謝罪していることは耐えがたいからだと説明した³⁶。

一方、同盟90/緑の党は概してSPDより批判的であり、連邦議院内務務卿は「フィルビンガーがナチ独裁の敵対者ではなかったことをエティンガーは内容的に明確にしなければならぬ」として「距離を置く」曖昧な陳謝では不十分だと主張し、全国代表ピュティコーファーはあらためて退陣を要求した。けれども他方で同党のバーデン＝ヴュルテンベルク州の指導者W.クレッチュマン

は、「私の個人的経験からすれば、エティンガーは右端のほうで支持を集めようとする嫌疑を招く人物ではない」などとして彼を弁護し、退陣要求には同調しなかった。さらにFDPは声明を公表し、エティンガーは「歴史的真相を承認した」と認めつつ、このような事件が再発しないように歴史に取り組むべきだとCDUに求めている³⁵。

このようにエティンガーの謝罪表明をめぐり、追悼演説批判で足並みを揃えたCDU以外の政党では、了承から退陣要求まで反応は大きく分かれた。しかし政党レベルから視界を社会にまで広げれば、G.ディ・ロレンツォが指摘するように、「全般的な空気の緩和が広がった」のは否定できない³⁶。それを端的に示すのは、30年前にフィルビンガー追及の手を緩めず、退陣にまで追い込んだホッフフォートの言葉であろう。彼はエティンガーの謝罪を踏まえ、「彼は洞察力を示し、陳謝した。これにより事件は片付いた」と満足気に語ったのであり³⁷、こうして失言問題は転機を迎えたのである。

4. 再起の模索

CDU幹部会での謝罪表明を折り返し点にして、エティンガーは事態收拾に向けて積極的に動き出した。その際、彼が鍵の位置にあると見做したのは、ドイツ在住ユダヤ人中央評議会だった。同評議会は彼に退陣を迫っていたからコンタクトを取ることさえ容易ではないはずだったが、失言問題に決着を付ける突破口になるとの計算から、大胆にも彼は同評議会に会談を申し入れ、対話の可能性を探った。もちろん、辞任要求を突きつけていたことから考えて、会談の要請が即座に撥ね付けられ、ますます苦境に陥るリスクは当然存在した。しかし過去の克服に関する同評議会の道徳的影響力が大きいだけに、そこで誠意をこめた謝罪を演出し、これを受け入れてもらうことによって免責の儀礼をすることは、再起への重要な踏み台であり、避けられない通過点でもあった。

謝罪を表明した16日、同評議会事務局長S.クラーマーはエティンガーから会談の申し入れがあったことを公表した。その際、彼は「謝罪は第一歩に過ぎな

い」から、執行部が会談に応じるという決定をするかどうかは分からないとし、次のように付け加えた。「フィルビンガーは明らかにナチの共犯者だった。これは歴史的に証明されている。」それゆえ、「エティンガーとの会談は、彼がナチ時代におけるフィルビンガーの役割を誤解の余地なく明示しなければ、意味をなさない。」「修正主義的発言」によって彼は「ドイツの抵抗運動を歪曲し」、結果的に「特にナチの過去の克服に関して甚大な被害を及ぼした。」このようにクラマーは会談の是非に関連して、鋭くエティンガーを指弾したのである⁹⁸。

ユダヤ人中央評議会事務局長のこうした言辞からすれば、会談は拒否されるか、開かれても厳しい条件が付けられると考えるのが自然であろう。事実、W.ヴェットは『フランクフルター・ルントschau』紙への寄稿の中で、エティンガーにとり会談の申し込みはカノッサ行きに等しいと呼んでいるが、この見方は失当とはいえない。仮にエティンガーが本心から追悼演説の誤りを反省していたとしても、州首相の地位にある者からすれば、なにがしかの屈辱感が伴ったのは容易に想像できるからである⁹⁹。それだけに、報道による限り、同中央評議会が特段の条件を設けずに会談に応じたばかりでなく、謝罪に了解を与えてエティンガーを事実上免責したことは、事柄の成り行きに照らして意外であり、そのニュースは驚きをもって受け取られることになったのである。

会談の申し入れのあった翌日、17日の朝、ユダヤ人中央評議会がこれを受諾したとのニュースが流れた。受諾を発表したのはクラマーだったが、その際、彼は執行部との会談は行われるが、「免責という目標を持ってではない」と釘を差すのを忘れなかった。会談することと赦すこととは、改めて指摘するまでもなく、同一ではないからである。けれどもこの言葉には真実味が欠けていたのも見逃せない。というのは、他方で彼は謝罪発言を追悼演説での立場からの「離反と距離の証明」だと評価し、エティンガーに対する辞任要求は片付いたと述べたからである¹⁰⁰。その上、会談に応じるに当たって表向きはいかなる条件も付けられていなかった事実も見過ごせない。後から考えれば、無条件の会談受諾に加え、会長であるクノープロッホ以上に中央評議会でもエティンガー批判の先頭に立ち、退陣を迫る急先鋒と目されたクラマーのこの軟化で、すでに

会談の行方がある程度見通しえたといえよう。

ユダヤ人中央評議会執行部とエティンガーとの会談は19日に行われた。そしてこれに関する中央評議会の声明が同日に発表された⁴⁴。会談には中央評議会側では会長クノープロッホ、事務局長クラマーのほか、二人の副会長が参加した。

声明によれば、中央評議会が追悼演説とそこに表れた歴史像の問題点を指摘した。これに対し、エティンガーは遺憾の意を表し、距離をとることを確約して真意を説明した。これを受け、中央評議会が掲げていた退陣要求は、それが向けられていた問題表現が取り下げられたから「対象を失った」として放棄する旨をクノープロッホが表明した。さらに会談では、「ナチ独裁との取り組み」を今後も継続すべきこと、それは「ドイツにおける政治文化の確固たる構成要素」であり、とりわけ政治の責任が重いことが確認され、その一方で、政治的・宗教的過激主義に対処する必要性で双方が一致したと声明は伝えている。

会談後、それ以前には多弁だったクラマーは寡黙になり、クノープロッホの言葉も少なかった。彼女は会談をさわめて建設的だったと評価し、「州首相が演説から距離をとったので、われわれはそれを了承した」と述べるにとどまった。他方、エティンガーも「私の演説の誤っていた点をもう一度説明し、それから一貫して距離を置いた」と繰り返しただけだったが、『フランクフルター・ルントschau』は、「山を越したとしていささか安堵し、満足している」様子が窺えると報じている⁴⁵。このように彼が安堵したのは、二つの理由のためであろう。一つは、辞任要求まで打ち出したユダヤ人中央評議会が彼の謝罪と釈明を了承したことが一般には事実上の免責と受け取られたことである。そのことは会談直後に『フィナンシャル・タイムズ・ドイツ』が会談の結果を「中央評議会はエティンガーに赦しを与えた」という見出しで伝えたことに示されている。もう一つは、上述したように、ユダヤ人中央評議会が再起への関門であり、その突破にほぼ成功したからである。会談自体の内容をはじめ、会談受諾に当たって事前にどんな合意がされていたかは明らかではないが、いずれにしても、会談を伝える記事に『ターゲスシュピーゲル』が「ぬくもりのコース

に立つエティンガーと中央評議会」という皮肉のきいた見出しを付けたのは至当だったといえよう⁴⁸。ただ「ぬくぬくと温まる」ことができたのはカノッサ行きを覚悟していたエティンガーのほうであり、謝罪訪問を受けて面目を保ったとしても寛大な免責を与えた中央評議会にはこの表現は必ずしも当てはまらない。その意味では、「中央評議会はエティンガーに手を差し延べる」という『フランクフルター・アルゲマイネ』の率直な見出しのほうが表現として正確だといえよう⁴⁹。けれども、同評議会がなぜ決定的局面でそのようにしてエティンガーの再起を助けたのかは不透明のままだといわねばならない。

ともあれ、会談の開催に漕ぎ着けただけでなく、期待していた成果を取めたことによってエティンガーは窮地を脱するのに成功した。確かに批判の声は沈静したわけではなく、例えば謝罪を尊重すると公言したSPD党首ベックは「問題はまだ終わっていない」として、エティンガー批判を継続した。しかし、その場合に注目されるのは、標的がエティンガー一人ではなく、むしろCDU右派に広げられていた点である。フィルビンガーは辞任後にヴァイカースハイム研究センターと称する右翼的傾向の団体を設立したが、エティンガーもつながりのあるこの組織を目し、追悼演説の温床にもなったそうした団体との関係をCDUは清算すべきだと主張したからである。ベックの認識では、エティンガー失言問題は「単なる脱線以上のもの」であって、むしろ「ひとつの態度の表れ」だったのである⁵⁰。

ユダヤ人中央評議会で再起への確実な足場を固めたエティンガーが次の大きな舞台としたのは州議会だった。

4月25日の州議会に登場したエティンガーは、南西ラジオの報道では、見るからに緊張した面持ちだった⁵¹。この場で彼は改めて陳謝し、追悼演説ではフィルビンガーに「気持ちよく別れを告げる」ことを考えていたのであって、「誤った表現」をしたのはそこに原因があったと釈明した。同時に、しばしば指弾される政治的打算は当たらず、他意はなかったと述べ、「古いナチもネオナチも我々の政治の目標ではない。我々には、そしてバーデン＝ヴュルテンベルクのCDUには右端のほうで人を引き寄せるつもりはない」と断言した上で、

謝罪を受け入れてくれるように要請したのである³⁸⁾。

SPDを代表して発言したのは、同州の委員長U.フォークトだった。彼女によれば、追悼演説に特徴的なのは「前例のない歴史の忘却」であり、単なる謝罪で片付くようなものではなかった。だから「私はあなたが職務に必要とされる正しい内面的な羅針盤を持っていることを大いに疑う」と明言し、適格性を欠如したエティンガーが州の進むべき方向を決定することを問題視した。しかし、辞任要求に一直線につながるそうした峻烈な批判にもかかわらず、彼女は辞任要求を繰り返すのを避けたのであり、その限りで批判を和らげたのが注目されよう。

同盟90/緑の党からはクレッチュマンが登場した。彼はCDUが一種の「精神的な障地」に立てこもり、ナチの過去の克服を忽せにしたところに問題の根源があると断じた。彼によれば、かつてフィルビンガー辞任の当時、同党が「かつて法であったものは、今日、不法ではありえない」という弁明を無批判に受け入れたのはその証拠であり、それを背景にしてエティンガー問題が起こったのだから、CDUは議論を終わらせるのではなくて、開始しなければならない、こうクレッチュマンは要求したのである。

これらに比べるとFDPの立場は温和だった。同党の院内総務U.ノルはエティンガーが失敗を犯したものの、追悼演説の責任をそれを用意した協力者に押し付けなかったことを肯定的に評価した。そのうえで、彼が距離をとることを表明したからには、「退陣に関する論議に終止符が打たれねばならない」と主張し、議論に幕を下ろすべきだと唱えたのである。

こうしてエティンガー発言をめぐる州議会での議論は終結した。そして事態は次第に平静を取り戻し、政治的日常が再び進行しだした。もちろん、振動が大きかっただけに後始末が必要とされたのはいうまでもない。その代表例は更迭人事が行われたことである³⁹⁾。演説草稿を仕上げたのは政治学で博士の学位を有する側近のグリミンガーという人物だったが、フィルビンガーへの敬愛を隠さなかった彼は官房から他の部署に異動を命じられ、早晩退職することになった。しかしエティンガーには草稿に手を加える余地があったことを考えれば、

ノルの指摘に反して、部分的ではあれ責任が押し付けられたといわねばならないであろう。これに関連して、エティンガーには側近に一卵性双生児ともいえる協力者がいないことも浮かび上がった⁹⁸。「瞬間の奴隷」と揶揄される軽はずみな性格に加え、信頼に足る協力者や助言者が周囲にいないことが、彼を窮地に追いやったことが明るみに出たのである。

いずれにせよ、エティンガーは失言で威信を失墜し、彼に対する信頼は大きく損なわれた。そのことは世論調査の結果が示している。南西ラジオの委託で調査機関インフラテスト・ディマップが16日夜に電話で1000人の州内の有権者を対象にして調べた限りでは、回答した57%の有権者のうち、76%はエティンガーは傷ついたとの認識であり、67%は発言を撤回もしくは改めるべきという意見だった。また43%はエティンガーは良い州首相とは言えないと見做し、36%はバーデン＝ヴュルテンベルク州の威信が損なわれたと考えていた。ただ辞任が必要とするのは19%にとどまり、多くの市民は退陣までは求めていなかったのが注目されよう⁹⁹。というのも、そこからは普通の市民が発言の適切性と重大性を区別し、不適切ではあっても重大だとは受けとめていなかったことが窺えるからである。

それはともあれ、このような調査結果に照らせば、エティンガーの信用が落ち込んだのは明瞭であろう。けれども、州首相として彼は連邦レベルでもいくつかの要職に就いていた。例えばドイツでは国家の骨格である連邦制の見直しが進められており、それを担当する委員会で委員長の座にあったが、信頼喪失のためにそうした職務の遂行にも支障が生じるだろうとR.ゾルトが予想したのは決して的外れとはいえなかった¹⁰⁰。しかしより重要なのは、世論を揺るがす舌禍事件を引き起こしたにもかかわらず、しかも当初は事柄の深刻さを認識せず、真摯な反省の弁もないままずるずると退却したにもかかわらず、突きつけられた辞任要求を撥ね返して、結果的に職にとどまることに成功したことである。実際、再三の釈明にもかかわらず、彼が追悼演説の誤りを本当に認識し、本心から謝罪したかどうかは判然としない。その意味では、重大な失言であっても、巧妙に立ち回れば致命傷に至らず、政治生命をつなぐことが出来るとい

う前例ができたことをエティンガー事件は示しているといえよう。

5. 政治過程の注目点

以上で跡付けてきたように、追悼演説直後から集中砲火を浴びてエティンガーは退却し、窮地に陥った。そして起死回生のために謝罪に踏み切り、これを転回点にして再起の可能性を模索し、遂には辞任要求を斥けて州首相ポストに居残ることに成功した。この経過を振り返ると、流れの転換の鍵になったのが謝罪表明だったことは明らかであろう。そして再起を確実にする上で重要な位置を占めているのが、ユダヤ人中央評議会との会談だったことも説明を要しないであろう。

それでは多方面から批判を浴びたにもかかわらず、発言を撤回しないとしていたエティンガーが、曖昧な表現ではあれ、CDU幹部会の席で謝罪に転じ、方向転換したのはなぜだろうか。まずこの問題を考えてみよう。

この転換に関し、B.デリースとJ.シュナイダーは4月17日付『ジュートドイツェ』紙で「助言に基づく後悔」という見出しをつけて報じている。それはたとえ上辺だけであっても「後悔」による謝罪が「助言」に基づいて行われたと見られるからである。この観点から各種の報道を見渡すなら、CDU指導部とりわけメルケル首相の説得が重要だったと思われる。実際、メルケルの役割が重要だったという点で衆目は概ね一致しているといっていよい⁹⁰。

1953年生まれのエティンガーはメルケルより1歳年長で殆ど同年齢だが、1975年にCDUに入党しているから、東ドイツ出身でドイツ統一時に黨員になったメルケルより党歴は遙かに長い。その上、政治的キャリアがないままコールによる抜擢を起点にして短期間に党首と首相に上り詰めたメルケルに比べて政治歴が長く、地元に着した活動を重ねて経験も豊かである⁹¹。さらに彼のポストである州首相は独立性が強く、公式には連邦宰相の指揮や監督を受ける立場にはないのは指摘するまでもない。

このようなエティンガーが、事件が発火した早い段階でメルケルの介入を許

ただだけでなく、結局は彼女の説得に従い、あるいは表現を変えればその圧力に屈した原因はどこにあるのだろうか。

事件の経過を追う限りでは、最大の原因は発言の問題性を彼が十分に認識せず、そのために批判の風圧を甘く考えていたところにあったと思われる。エティンガーがナチ・レジームの敵対者だとしてフィルビンガーを称揚したとき、遺族や周辺の人々に対するリップ・サービスが動機になっていたのは確かであろう。その面からすれば、彼の軽率さと無思慮が問題になる。またSPD党首のベックなどが指摘したように、政治的スペクトルの右端のほうの保守層に取り入ろうと計算したならば、反撃の強さが視野に入っていなかった点で、政治的計算能力の欠如が問われることになる⁶⁶。いずれにしても、過去の克服に直結するセンシティブなテーマに踏み込んだにもかかわらず、そのために必要な準備や心構えが彼にはなく、その結果、批判の嵐の前で立往生せざるをえなかったといえよう。当初の強気が挫け、問題解決の見通しのないままずるずる退却したのは、彼に事態打開の術がなく、途方に暮れていたことを証明している。そしてフォーゲルをはじめとして何人もの識者が指摘するメルケルの圧力は、このような状態においてはまさに言葉の正確な意味での助言としてエティンガーによって受容されたと考えられる。

それでは何故メルケルは圧力と受け取られる危険を冒してまで事件に介入し、助言の形でエティンガーに威圧を加えたのであろうか。4月13日と14日の『フランクフルター・アルゲマイネ』では、彼女の介入に関し、「即座に反応した」ことと「稀に見る行動様式」の2点で異例さが強調されているだけに、この点が答えられなければならないであろう。

メルケルは追悼演説に対する批判が出た直後からエティンガーに電話して忠告を与えた。メディアによってはこれを譴責と呼んでいるが、その性格付けは微妙であろう。発表されている限りでは、エティンガーに対してメルケルは、州首相としてのフィルビンガーの評価と並んで、ナチ時代と関連した苦しい問題にも言葉を費やすべきだったと語り、さらにその際には「ナチ・レジームの犠牲者とその関係者の感情に特に考慮を払わなければならない」と忠告した⁶⁷。

異例なのは、そうした自分の考えをエティンガーに伝えて説得したことをマスメディアに公表した点である。そうすることによって圧力を強めようと意図したとも理解できるし、エティンガーとの違いを示して自衛を図ったとも推測できるが、電話会談の本当の内容はもとより、公表の意図も不明なままである。確実にいえるのは、当初はエティンガーが強気であり、助言に従わなかったが、それでもメルケルが介入を繰り返し、結局は受け入れさせるのに成功したことである。その点から見て、エティンガーを翻意させ、謝罪表明に導いたのはメルケルだったのは間違いない。彼女は孤立し途方に暮れたエティンガーを説き伏せ、屈服させたのである。

こうしたメルケルの成功に対しては党派を超えて多方面から称賛の声が寄せられた。その例としては、SPD元党首フォーゲルの賛辞が挙げられよう。けれども、CDUの党内からは批判が聞かれたことも見逃せない。例えば同党右派を代表するブランデンブルク州内相J.シェーンボームはメルケルの公然たる介入はエティンガーだけでなく党をも傷つけたと難詰した。彼からみれば、メルケルの行為は苦境に立った同志を奈落に突き落とす背信行為に等しく、電話会談の公表は有害だった。なぜなら、明言を避けているものの、彼の意中を忖度すれば、その公表はエティンガーが面目を保ちつつ後退する可能性を奪ったと考えられたからである。この結果、「風が強く顔に吹きつけたときでも我々が共に立ち向かうかどうか」が疑問視されるに至った。この観点から、「党首によるCDU所属の州首相の公然たる平手打ち」は党のスタイルに全く馴染まず、メルケルは不文律を犯した、こうシェーンボームは彼女を非難したのである⁹⁰。

こうした批判は十分に予想されたものであり、あらかじめ折込み済みだったといえよう。それにもかかわらずエティンガーに対してメルケルが強力に圧力をかけた動機としては二つが考えられる。一つは権力政治的な考慮である。

エティンガーに対してCDUの一部から擁護する発言が見られたように、過去の克服をめぐる同党の内部事情は複雑であり、一枚岩には程遠い。右派の闘将として知られるのは、かつては連邦議会院内総務の座にあったR.バルツェルだったが、今日では上記のブランデンブルク州内相シェーンボームが代表格で

あろう。彼らは価値保守主義ないし国民保守主義と呼ばれる立場から度々きわどい発言を繰り返し、保守層に歓迎されてきた。最近の例では、2007年9月に人気テレビキャスターのE.ヘルマンがナチスの家族政策に肯定的な発言をして問題になり、テレビ局から途中で契約を打ち切られた際、シェーンボームが彼女を弁護したことが挙げられよう⁹⁷。けれども、近年の連邦議会選挙を見れば明白のように、国民党の衰退が進行すると同時に、国政選挙でCDUの優位が失われてSPDと競り合うようになっている今日⁹⁸、彼らの言動に引きずられて右にシフトすることは大きなリスクにならざるをえない。なぜなら、中道色が薄まれば広大な政治的空間をSPDに明け渡し、右派的体質を嫌う有権者を奪われる結果になるからである。この観点から見れば、率先してか不承不承かを問わず、客観的にはナチの協力者だったことが確かなフィルビンガーを「ナチ・レジームの敵対者」と呼ぶのは、歴史の偽造というだけではなく、許容限度を超えていてCDUに危害が及ぶとメルケルには映ったと思われる。仮にそれを黙認するなら、右派の政治家がフィルビンガーに続き次々とナチの共犯者を復権させる可能性がある。そのような行為はCDUを右派政党として固定化するが、政権からの転落を避けがたくするであろう。メルケルの介入について考えられる第一の要因は、このような選挙政治的もしくは権力政治的な考慮である。実際、『ヴェルト』の報じるところでは、上昇気流に乗っていたCDUの支持率は4月下旬にかけて僅かながら下降に転じたのであり、同紙はこれを「エティンガー演説がCDUの高空飛行を止める」という見出しで伝えている⁹⁹。支持率の下落と演説の反響との間にこのような因果関係が本当に存在するのか否かは不明であるものの、右へのシフトが限度を超えた場合に起こる変動の予兆として受け止められた可能性は排除できないであろう。

いま一つの動機だったと思われるのは、イデオロギーの排斥である。

メルケル政権が発足した当初、「コールの娘」と呼ばれてひ弱に見え、しかも大連立に伴う困難から、メルケルの政権運営の手腕が危ぶまれ、次期連邦議会選挙まで持ちこたえられるかどうかとも怪しいという観測すら出た。しかし首相に就任してから主として外交で得点を稼ぎ、次第に内政面でも実務的能力を

發揮した。2007年には先進国サミットの開催国になり、単独行動に傾斜するアメリカを引き込んでサミットの中で温暖化対策での合意を取り付けただけでなく、すぐあとのEU首脳会議では議長国としてポーランドの抵抗を抑えてEU憲法条約に道筋をつけるなどの成果を挙げ、国際的にも高い評価をメルケルは獲得した。それだけではない。2007年にシラクとブレアが相次いで引退したことが手伝い、メルケルは拡大で巨大化したEUのトップ・リーダーとしての地位を不動のものにしたのである⁶⁰。こうした成功の原因は、イデオロギーに囚われない柔軟な思考と調整と妥協を重視する姿勢にある。彼女にとっては理想的なことより可能なことが優先するのであり、それは言葉を変えれば、イデオロギーによる束縛が希薄であることを意味している。イデオロギー過剰の東ドイツで育った彼女には、西側の民主主義とその土台となる価値観が共有されている限り、多様な立場にいわば等距離で対する姿勢が見られ、特定のイデオロギーに対する肩入れは乏しいといえるのである⁶¹。

このようなスタンスは、懸案解決に当たって実務的に処理する手法に表れている。SPDとの連立という制約だけではなく、雇用や財政などの厳しい実情から採りうる政策的選択肢が限られているが、それはイデオロギーの希薄な実務的政治家に恰好の舞台を用意した⁶²。事実、付加価値税の増税と企業負担の軽減、年金支給開始年齢の段階的引き上げ、一定の範囲での最低賃金制導入など国民生活に関わる面で着実に社会国家の改造と競争国家への再編を進め、シュレーダー政権が取り組んだアジェンダ2010の政治を実質的に推進している。2007年9月の演説で、今日のドイツ経済の復調は自分だけではなく、前政権による改革の成果だと明言し、かつて野党の党首として対峙したシュレーダーの功績を称えたのも⁶³、イデオロギーや党派性を重視しない姿勢の証左であって、連立パートナーたるSPDへの配慮以上の意味を有しているというべきであろう。

さらに過去の克服に関わる面では、戦後生まれであることが重要であろう。戦争を身をもって経験したコールまでの世代と違い、戦後に成長した一人として、ナチズムの罪業は直接には父母に帰せられるべきものであり、自分自身の責任ではありえない。したがって、フィルビンガーのような無数のナチ協力者につ

いても、次世代の立場から批判を加えることは容易であり、庇わなければならない動機は乏しい⁶⁶。その点ではエティンガーも同様であり、だからこそリップ・サービスの面や保守層を引き寄せる政治的打算が問題になるといえよう。戦後に生まれたメルケルにはナチズムと戦争を突き放して捉えることが可能であって、渦中に生きた人々とは違って弁明や正当化の必要性はなく、それだけ被害者の存在も視野に入りやすい。このようにイデオロギーの束縛が緩く、戦争の正当化の動機に乏しいメルケルには、フィルビンガーを美化し、「歴史のでっち上げ」をするエティンガーの発言は過剰なイデオロギーもしくは過度の正当化と映ったのは想像に難くない。そしてドイツで論争を積み重ねつつ形成された緩やかなコンセンサスから逸脱し、ナチズムの否定に立脚する戦後ドイツの政治的土台を脅かす点で許容限度を超えていると判断されたがゆえに、異例さを顧みずメルケルは失言問題に強力に介入したと考えられる。実は2003年にもCDU所属の連邦議会議員マルティン・ホーマンが同種の舌禍事件を引き起こし、二転三転の末、結果的に同年11月に院内会派から除名されたが、このような厳しい処分にもメルケルの上記の姿勢が反映していたといえよう⁶⁷。

いずれにしても、メルケルの助言と圧力がエティンガーを謝罪に導いたのは確かであろう。そしてP.フライが指摘するように、「CDU党首としての7年間にトップの人物をこのように叱責したことはない」ことに照らすと、この問題で彼女が普段みせるイデオロギー色の薄い実務的政治家の枠をはみ出し、「決然たる宰相」として行動したのは間違いない⁶⁸。彼女の異例で断固とした介入が事件の転換点になり、収集に向かって局面が切り替わったのは上述したとおりであり、歴史認識に関わるコンセンサスとCDUの信用を守ることによって、結果的にメルケルはエティンガーをポスト喪失の危機から救出することになったのである。

ところで、この過程を制度的側面から眺めると、注目すべき事実が浮かび上がる。本稿の冒頭でも指摘したように、連邦宰相としてのメルケルには公式には州首相であるエティンガーを叱責したり懲戒する手段も権限も与えられていない。その意味で彼女の武器になったのはもっぱらCDU党首としての地位だ

った。彼女は党首という立場を前面に押し出し、恐らくは助言に従わなければ執行部として彼を庇いきれず、あるいは見捨てるという意向を明示的ないし暗黙にエティンガーに通告したと推測される。そしてこの時、双方の脳裏には、類似の失言問題で厳しく処断され、最終的には連邦議会議員の地位をも喪失した2003年のホーマンの事件が蘇っていたであろう。助言に基づくエティンガーの謝罪表明を通じ、連邦制を反映して緩やかな分権的組織を特徴とするCDUであっても、党首が明確な政治的意思を持つ場合には、独立性の強い州首相をも屈服させ従属させられることが証明されたのである。このことは、組織構造上は弱い党首でも、人事権を駆使して挑戦者を排除したコールが党内で君臨し、強力な指導力を行使した例に見られるように、条件によっては強い党首になることが可能であることを含意しているといえよう。

それでは辛くも政治生命をつなぎとめたエティンガーが再起のための突破口としてほかならぬドイツ在住ユダヤ人中央評議会を選んだのは何故だったのだろうか。この点についても考えてみよう。

事件の経過で触れたように、同評議会では批判が噴出した最初の段階で幹部がエティンガーを非難している。また最初に退陣を要求したのはジョルダノであり、やはりユダヤ系知識人の声が大きかった。無論、CDUを除く主要政党から著名な政治家が一斉に攻撃を浴びせたとし、言論人もそれに倣った。そのことはマスメディアでの報道の過熱ぶりを見ればよくわかる。これによって事件は一気に時の焦点に押し上げられたのである。

そうしたなかで、ユダヤ人中央評議会が鍵の位置を占めたのには理由がある。既述のように、追悼演説に対する批判は政党人、言論人などから発せられたが、野党の政治家の場合、政治的計算が働くために理解を得るのは難しい。その上、テーマが過去の克服に関わると、妥協的態度を示すのは失点になりやすいため、公式論に固執しがちだし、謝罪する側は対抗する政党への屈服と受け取られ、屈辱的に感じよう。さらにドイツでは政治家の信頼度が概して低いのは各種の調査が示す通りであり、とりわけ道徳的次元を含む問題では政治家の理解を取り付けても世論に対するアピールとしては効果が乏しいと考えられる。

これに対し、ユダヤ系団体は犠牲者の立場を代表している。これは政党にはない道徳的優越を保証する最大の要因といえよう。政党人に対する釈明は、仮に了解を取り付けても道徳的免責にはなりえない。けれども、ユダヤ系団体の場合、謝罪が受け入れられれば道徳的に免責され、再起の道が開かれるという特殊性がある。逆に言えば、その免責が得られなければ、いつまでも非難にさらされ、問題が鎮火しないという構造が存在するのであり、その意味ではユダヤ系団体は一種の拒否権を把持しているといえよう。

一方、犠牲者の立場を代表するところから、過去の克服をめぐるテーマではユダヤ系団体は組織が小さいのと対照的に発言力が大きく、同時に世論において格別の重みがある。その重みが増したのは、M.ブレンナーによれば、ホロコーストの罪責がドイツ社会で広く認識されるようになり、同時にユダヤ人の側から積極的に世論に働きかけるようになった1980年代以降だといわれる⁸⁶。いずれにせよ、この問題領域でガリンスキー、ブービス、シュピーゲルなど中央評議会の歴代会長が繰り返し前面に立ち、あるいはジョルダノーがことあるごとに発言を求められるのは、その重みが大きいからにほかならない。このことは、ブービスとの論戦で注目を浴びた保守派の作家M.ヴァルザーの口吻をかりれば、ユダヤ系の人々がドイツ人を叱責し、懲らしめる「道徳的棍棒」を握っていることを意味しているといえよう⁸⁷。事実、ユダヤ系団体は、ドイツにおける過去の克服の監視役とも呼べる役割を担っており、失言をはじめ、排外暴力などで混乱が生じた場合にはしばしば議論の中心にも登場するのである⁸⁸。

エティンガーがユダヤ人中央評議会との会談を再起への鍵としたのは、以上のような背景から説明されよう。もとより、幹部による批判を考えれば、その場で免責を受けられる成算があったわけではないであろう。しかし、会談の申し入れに対して中央評議会は条件を付けずに受諾し、しかも会談の場でエティンガーを深くは追及しなかったように見受けられる。たしかに会談の申し入れはカノッサ行きに等しかったから、その場で改めて謝罪を受ければ面目が立ち、了解できたのかもしれない。けれども、事柄の重大さを考慮すると、やはり不可解な部分が残るというのが率直な感想であろう。ともあれ、最大の拒否権プ

レーヤーはそれを行使せず、会談後に辞任要求も取り下げた。これによってエティンガーには失言問題を沈静させ、職にとどまる可能性が開けたといえよう。

6. 失言問題の顛末とプチ・ナショナリズム — 結びに代えて

エティンガーの失言問題は、それが起こって半年もたない現在、すでに殆ど忘れられたように見える。その時に燃え上がった怒りの熱気は完全に消失し、半年前にテレビや新聞を賑わした事件があったことが今では幻影だったかのように政治的日常生活は坦々と進行している。一時は窮地に追い込まれたエティンガーは何事もなかったかのように執務しているし、州政治での彼の指導力が大きく落ち込んだ気配も感じられない。

そうした現実には実には二重の側面があったことに思い当たる。U.フレーフェルトによれば、今日のドイツには歴史認識に関して「基本的コンセンサス」が存在する。それは「過去30年の歴史的論議の中で形成され、極右の周縁を除くすべての政治的陣営を包括する」ものであり、「第三帝国の時期に前例のない規模の犯罪が国家の負託でドイツ国民の名において犯され、それゆえにこの時期を肯定的に追憶することは自ずから禁じられる」というものである。またこのコンセンサスの形成にあわせ、かつてのように第三帝国を「暴力支配」と呼び、その犯罪に国民が否応なく加担させられたとするのではなく、逆に犯罪への普通のドイツ人の主体的関与が問われるようになった⁹⁴。元の州首相フィルビンガーがナチ・レジームの同調者だったにもかかわらず、事実を歪曲して敵対者と呼んだエティンガーの発言は、こうした文脈で見れば、多年に及ぶ議論の蓄積を無視した暴論であり、過去の克服に直結しているだけに重大な失言だったことはいまさら指摘するまでもない。その点は多くの批判者が異口同音に問題にしたことであり、極めつけといえるのは、ドイツ史学界の泰斗H.-U.ヴェーラーの『シュピーゲル』への寄稿であろう。彼は次のように記している。「エティンガー事件は多くの観点から見て希少価値を持つ。なぜなら、ミニマムの言葉でマキシマムの危害が及ぼされることは稀

だからである。連邦州の首相はドイツの職業政治家のトップ集団に属すが、そのうちの誰一人としてこれまでに第三帝国についてこれほどの無知をさらけ出した者はなく、無知、臆病、思い上がりの混合をひけらかした者はいないのである⁷¹。」この峻厳を極めるヴェーラーの批判は多くの歴史家が共有しており、同世代ではH.モムゼン、中堅ではP.ノルテがその線上で発言している⁷²。また記憶の問題に取り組んでいる社会心理学者H.ヴェルツァーは、「著しく歴史を忘却した州首相の事件は決して孤立させて観察してはならない。それは、連邦共和国の戦後史を彩る想起の政治における痙攣の終わりなき連鎖の一齣なのである」と述べ、「歴史意識のようやく到達した水準を受け入れることの頑強な拒否」に批判の照準を合わせている⁷³。一方、言論界ではR.モアが「エティンガーはフィルピンガー弁護によってドイツの過去の克服を何十年も元に戻した」と痛罵し⁷⁴、同様に『ジュートドイッチェ』の著名なコラムニストH.プラントルも、ドイツでの過去との取り組みは4つの段階を経てきたことを指摘しつつ、エティンガーの失言によって「瑣末視、否認、ナチ共犯者のアムネステイ」という「第2段階への逆戻り」が起こったことを重視した⁷⁵。それゆえ、政界はもとより、学界、言論界からも彼が謝罪するまで追及の手が緩められなかったことは、戦後ドイツの政治文化の成熟の一つの指標であり、銘記されるべき重要な事実といえよう⁷⁶。そしてこれが問題の一つの側面である。

もう一つの問題の側面は、州首相という政治的要職にある人物が重大な失言をしたにもかかわらず、それが一過的な事件として片付けられ、忘れられようとしていることである。失言が知れわたった当初から多くの政治家やジャーナリスト、学者などが議論に参加したのは既述のとおりだが、それだけに何を詫びたのが判然としない曖昧な謝罪で事件が落ち着き、その後は取り上げられないままになっていることは、むしろ不可解といわねばならない。エティンガーに集中砲火が浴びせられたときの熱気がすさまじかったのは、失言が過去の認識という重要なテーマに関係していたためだとするなら、事件を過ぎ去ったこととして葬るのではなく、教訓として生かす工夫や努力が続けられて然るべきであろう。例えば、「歴史の粗雑で軽率な偽造をした後ではバーデン＝ヴュルテ

ンベルク州の州首相は歴史的・政治的啓蒙活動に取り組む義務がある」としてヴェツテはこう記している。「彼は若い人たちに、フィルビンガーという人物がナチ時代とその後どのように行動し考えたかを語り、確実な歴史認識に基づいたその像を描くべきである。各種の学校の関心のある教師たちには否定形だけでは十分ではない。彼らはもっと多くを知りたいと望んでいるのである。」このような観点から、ヴェツテはナチ時代と連邦共和国でのフィルビンガーの行動と経歴は、「多岐に亘る歴史的・政治的教材」であると位置づけ、事件を忘却に任せるべきではないと唱えたのである⁷⁰。

しかしながら、管見の限りでは、ヴェツテの提起に反響は殆どなかったように見受けられる。そして問題の一面はまさにこの点にある。エティンガーの謝罪表明でSPDの幹部は了承し、事件に幕を引く方向に転じた。同盟90/緑の党では対応が割れたものの、執拗に追及する姿勢は薄らいだ。連邦レベルでSPDと大連立を組んでいるCDUは、傷が深くなる前から党首メルケルが介入し圧力をかけたように、早期の決着を目指しており、エティンガーの謝罪で事件を終結させようとした。こうして反省と教訓を殆ど残さないまま事件は收拾され、非難の合唱にも終止符が打たれた。ドイツで歴史認識に関わる失言問題といえは、すぐに想起されるのはイエニンガー事件だが、インタビューに応じたSPDの元党首で長老のフォーゲルは、今回の問題でイエニンガー事件を思い起こしつつ、「一方での問題は不適切さであり、他方では誤りである」と指摘して、誤りが問われたエティンガー事件のほうが問題としては重大だという認識を示している⁷¹。事実、水晶の夜に関するイエニンガーの失言は、ドイツ語の表現方法の不適切さに原因があったのであって、彼の真意が聴衆の理解とは違っていたことは納得できた⁷²。これに対し、当初の強弁に見られるように、エティンガーの場合は認識自体が「歴史の偽造」にほかならず、事実上の撤回を強いられたことが示すように、真意が問われたのである。けれども、現実には連邦議会議長の要職にあったイエニンガーは即座に辞任したのに反し、より重大な失言をしたエティンガーは釈明を転々と変えた末に職にとどまった。事柄の重さに照らせば、本来なら結末は逆であるのが当然だと考えられよう。その意味

で、単純な比較は難しいにせよ、二つの失言事件の決着の相違は、やはり見過ごせない要点であろう。つまり、教訓として事件を生かす動きが見出されなかったことと、イエニンガー事件との決着の違いという二つの点でエティンガー失言問題の顛末は、集中砲火の激しさと華々しさに反して、事件が社会の表面的な次元で終始したことを示しているといえよう。

事件のこのような特徴に関連して、「エティンガー事件は全般的に歴史意識が薄らいでいる指標と思いますか」と問われたフォーゲルは、「そこまではいえない」と応じた上で、自分は事件を一般的現象の事例としてではなく、個別事件と見做すとしながら、次のように述べている。「事件の推移の仕方、党首が態度表明したこと、広範な議論が巻き起こったこと、最後にエティンガーが距離をとったこと、これらは一般的な現象が問題になっていたのではないことを示しているのである。⁹⁸⁾」こうした見地からフォーゲルは歴史認識が不徹底であるとか希薄化しているとはいえないとし、事件をあくまでエティンガー個人の問題に限定する立場を打ち出したのであった。

たしかにエティンガーに対しては非難の渦が起り、謝罪に追い込んだことは、重要な事実として銘記されるべきであろう。また、彼のような歴史の歪曲や軽率な扱いが社会に広く見られるわけではないから、警鐘を打ち鳴らすのは行き過ぎであろう。けれども同時に、フォーゲルの見方では問題の第一の側面だけしか視野に入っておらず、教訓の継承という第二の側面が見過ごされているように感じられる。失言問題に短期間で決着がつけられたことは、それ自体として十分に評価に値する。しかし他面で、2006年のサッカー・ワールドカップの際に顕在化した昨今のプチ・ナショナリズムの蔓延と重ね合わせた場合、大きな紛糾を招いたのに殆ど痕跡が残っていないことは、やはり事件の重要な一面だといえるべきであろう。

この点にあえて注目するのは、次の理由からである。すなわち、たびたび語られてきたように、ドイツでは第三帝国の罪の意識から「自民族をあるがままに愛する」ことができず、それゆえに世界に開かれたポスト・ナショナリズムが標榜されてきたことを思うと⁹⁹⁾、同じく世界への開放性が指摘されてはいて

も、近年のドイツで広がる陽気で屈託のない愛国心には歴史の反省に由来する屈折がなく、過去の錘がしっかりとついているようには見えないからである³³。例えばドイツの代表的な言論人T.ゾンマーは、2006年7月5日付『朝日新聞』への寄稿に「W杯 未知なるドイツとの遭遇」という表題を付けてドイツの変貌ぶりを強調しつつ、国内に溢れた「黒赤金の三色旗は、ドイツの熱狂的愛国主義の新たな兆しではまったくない。他国への敵対意識はみじんもなく、自国への愛情を素直に認めた屈託のない愛国心の表れだ」と肯定的に記している。また、マスメディアの多くもワールドカップを機に国民の間で高まった「陽気な愛国心」に無批判的だったという感を拭うことはできない。さらに自他共に認める社会史のリーダーで第三帝国に至る道の徹底的解明に取り組んできた先述のヴェーラーも、今日のドイツに見出されるのは立憲国家や社会国家と両立する「啓蒙的愛国心」であり、「アイデンティティのナショナルな構成要素は排除され、完全に後退した」として、「啓蒙的愛国心のための弁論は支持に値する」と言明した³⁴。これと同様の見解を、高名な現代史家であり、シュレーダー前政権の知恵袋ともいわれたH.A.ヴィンクラーも表明している。彼によれば、従来は「国旗の掲揚は国家の事柄であって、民間住宅での黒赤金の旗は事実上存在しなかった」から、「ドイツ人が他の国民と同じように愛国主義的に振舞った」ことは戦後史上かつてないことだった。この点にヴィンクラーは率直に驚きを示しながら、しかし、「黒赤金について語ることはドイツの自由で民主的な伝統を語ることを意味する」ので、湧き出した愛国心は「西側の政治文化が何十年かの経過の中でドイツ連邦共和国の主導文化になった」ことの証明だとしてポジティブな評価を下している³⁵。

しかしながら、改めて指摘するまでもなく、「素直」で「屈託のない」ことや「陽気な」ことこそプチ・ナショナリズムの主要な特徴であり、症候にほかならない。そして公的空間を埋めた旗ばかりでなく、顔や衣類などに描かれた三色のマークについても、それが祖国としてのドイツのシンボルである以上、その誇示が自由で民主的な価値観を反映しているとは限らず、ナショナルな感情の表出ではない保証はどこにも存在しない。この関連では、プチ・ナショナリ

ズムと同次元ではないにしても、シュトイバーCSU党首（バイエルン州首相）を先頭にしてドイツ国民を「運命共同体」だと唱える言説が依然として根強い現実や、さらには排外暴力が絶えないことから国家民主党（NPD）の禁止問題がくすぶり続けている事実がやはり想起されるべきであろう。また、敗戦60周年を目前にした2005年4月に公表された世論調査によれば、24歳以下の若者でホロコーストとは何かを正しく答えられたのは半数しかなく、ナチをはじめとする自国の歴史に関する知識の欠如が憂慮されたことや⁶⁵、同じく2007年の調査から、第二次世界大戦期の犯罪に関する青少年の知識が乏しいだけでなく、彼らの間で「ユダヤ人」という語が罵りの言葉として頻繁に使われている現実が明るみに出たことなども合わせて思い起こしてよいであろう⁶⁶。

こうした点を考慮すると、言論界と歴史学界の重鎮であるゾンマー、ヴェーラー、ヴァインクラーが街頭に溢れる国旗の波に健全な愛国心の発露をみて、何の疑問も感じていないところにこそ、むしろ問題が伏在しているように思われる。公然化した三色のシンボル・カラーには「他国への敵対意識はみじんもない」のが事実だとしても、同時にそこには歴史の反省もみじんもないかもしれないからである。このような観点から眺めるなら、本稿で跡付けてきたエティンガー失言問題の顛末は、発言そのものだけでなく、事件自体の痕跡がほとんど見出されないことから、見方によっては、「全般的に歴史意識が薄らいでいる指標」であり、その風化の表れであるとも考えられよう。エティンガー事件自体は瞬時に燃え広がり、束の間に鎮火されたが、短期で決着して今では忘却の淵に沈みつつあるという現実こそ、事件が浮かび上がらせた真の問題といえるのではなかろうか。

注

- (1) 追悼演説の全文は、Staatsministerium des Landes Baden-Württemberg, Pressestelle der Landesregierung, Pressemitteilung vom 12.4.2007, Nr.113/2007に公表されている。また4月12日付『ジュートドイッチェ』紙にも全文が、さらに同日の

『フランクフルター・ルントschau』紙には抜粋が掲載されている。なお、フィルピンガーが死去した直後の主要全国紙に追悼文が掲載されているが、そのなかで出色といえるのは、2007年4月3日付『フランクフルター・ルントschau』紙に載ったP.ヘンケルの「失敗から学ぶことの出来ない人」と題した一文であろう。なお、次の各紙の見出しを見比べただけでも論争的であり、極めて興味深い。R.ゾルト「過去によって責められて」（フランクフルター・アルゲマイネ紙）、W.ライマー「政治的なヤヌスの顔」（ジュートドイッチェ紙）、D.F.シュトルム「復権のための30年の闘争」（ヴェルト紙）、R.モア「州首相、海軍裁判官、同調者」（シュピーゲル誌）、R.ライヒト「不法」（ツァイト紙）。

- (2) なお、フィルピンガーの略伝として次の文書が参考になる。Landeszentrale für politische Bildung Baden-Württemberg, Früher Ministerpräsident Hans Filbinger ist tot.
- (3) Rolf Hochhuth, Schwierigkeiten, die wahre Geschichte zu erzählen, in: Die Zeit, Nr.8, 1978. ホッフホフトは6月にもフィルピンガーを告発する寄稿をしている。Ders., Der Zynismus ist beispiellos, in: Der Spiegel, Nr.24, 1978.
- (4) Wolfram Wette, Wegen Kriegsverrats verurteilt, in: Frankfurter Rundschau vom 16.6.2007.
- (5) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 13.4.2007.
- (6) この間の経緯については『シュピーゲル』1978年28号の特集が報じており、また所属するCDUの主要政治家から見放された状況や、辞任の反響についても同誌の報道が参考になる。Der Spiegel, Nr.30,1978, S.31ff.; Nr.32,1978, S.29ff. なお、フィルピンガーの弁明の抜粋とH.ビーバーたちの詳細な調査報告、それに基づくフィルピンガーに対するT.ゾンマーの批判が1978年5月12日付『ツァイト』に掲載されている。Die Zeit, Nr.16, 1978.
- (7) 拙著『統一ドイツの変容』木鐸社、1998年、265頁。
- (8) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 14.4.2007.
- (9) Financial Times Deutschland vom 13.4.2007. 因みに4月16日発行の『シュピーゲル』は追悼演説を「免罪の文章と大胆な清浄化の試みの混合」と呼んでいる。Der Spiegel, Nr.16, 2007, S.36.
- (10) SWR-Nachrichten vom 16.4.2007. ドイツ在住ユダヤ人中央評議会には後でも言及するが、その成立事情や負の側面に関しては、武井彩佳『戦後ドイツのユダヤ人』白水社、2005年、74頁以下、125頁以下参照。
- (11) Focus vom 12.4.2007. Die Welt vom 12.4.2007.
- (12) Focus vom 13.4.2007. ジョルダーノはさらにインタビューで批判的見解を詳しく展開している。Süddeutsche Zeitung vom 17.4.2007.

- (13) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 14.4.2007.
- (14) Die Zeit vom 13.4.2007. Focus vom 13.4.2007.
- (15) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 12.4.2007.
- (16) Süddeutsche Zeitung vom 12.4.2007. SWR-Nachrichten vom 12.4.2007.
- (17) Die Welt vom 16.7.2007. ナチ黨員だった過去をエブラーはすでに13年前に公表しており、自分は意思に反して入党したのではなかったが、それは16歳の少年の愚行だったと悔恨の弁を述べている。なお、学者のN.ルーマンやH.リュッベ、作家のM.ヴァルザー、政治家のH.エームケ、ジャーナリストのP.ベニシュなど、エブラーと同年代の多くの著名人がナチ党に入党していたことを『フォークス』が報じて話題になったが、そうした「暴露文化」の問題点に関し、Henryk M. Broder, Sonderweg mit brauner Karte, in: Der Spiegel vom 18.7.2007参照。
- (18) Süddeutsche Zeitung vom 13.4.2007. Die Welt vom 13.4.2007.
- (19) Deutschlandfunk-Nachrichten vom 14.4.2007. Stern vom 14.4.2007.
- (20) Der Spiegel vom 14.4.2007.
- (21) Süddeutsche Zeitung vom 13.4.2007.
- (22) エティンガーの公開状は、次の表題で州政府から発表されている。Offener Brief an die Kritikerinnen und Kritiker meiner Trauerrede zu Hans Filbinger vom 14.4.2007.
- (23) Die Zeit vom 14.4.2007.
- (24) Der Spiegel vom 14.4.2007.
- (25) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 15.4.2007.
- (26) 『ビルト』に掲載されたインタビューは州政府によっても公表されている。Interview mit Ministerpräsident Günter Oettinger in der BILD-Zeitung vom 16.4.2007.
- (27) Stern vom 16.4.2007.
- (28) Frankfurter Rundschau vom 17.4.2007.
- (29) Stern vom 16.4.2006.
- (30) エティンガーは一貫して「距離を置く」という表現を使い、否定の語はもとより、撤回という言葉も使っていない。この表現は何かから離れ去ることを指し、したがって意見などに関しては、関わりがないことや考えを異にすることの表明を意味するが、少なくとも明確な否定までは含意していないといってよい。この点を考慮すると、前言の否定を避けるために彼が意図的にこの表現を選んだのは明白であろう。ここで鍵になるのは曖昧さであり、それゆえ、以下では「距離を置く」という言葉を使うことにする。
- (31) Ludwig Greven, Späte Einsicht, in: Die Zeit vom 16.4.2007.

- (32) Tagesschau vom 17.4.2007.
- (33) Stern vom 16.4.2007. Tagesschau vom 16.4.2007.
- (34) Süddeutsche Zeitung vom 16.4.2007.
- (35) Tagesschau vom 16.4.2007.
- (36) Giovanni di Lorenzo, Damit werden wir fertig, in: Die Zeit, Nr.17.2007.
- (37) Tagesschau vom 17.4.2007.
- (38) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 16.4.2007.
- (39) Wolfram Wette, Oettingers Entschuldigung genügt nicht, in: Frankfurter Rundschau vom 21.4.2007. 因みに後でも触れるヴェッテはフライブルク大学に所属する現代史担当の教授であり、下からの視点を重視する軍事史家である。丸島宏太「下からの軍事史と軍国主義論の展開」『西洋史学』226号、2007年、46頁。
- (40) Netzzeitung vom 17.4.2007.
- (41) Zentralrat der Juden in Deutschland, Presseerklärungen vom 20.4.2007.
- (42) Frankfurter Rundschau vom 20.4.2007.
- (43) Der Tagesspiegel vom 19.4.2004.
- (44) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 19.4.2007.
- (45) Süddeutsche Zeitung vom 19.4.2007.
- (46) SWR-Nachrichten vom 25.4.2007.
- (47) 以下の州議会での議論については次を参照した。Landeszentrale für politische Bildung Baden-Württemberg, Umstrittene Trauerrede für Hans Filbinger.
- (48) Der Spiegel vom 28.4.2007.
- (49) Rüdiger Soldt, Ministerpräsident ohne Krisenmanagement, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 17.4.2007.
- (50) SWR-Nachrichten vom 18.4.2007.
- (51) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 17.4.2004.
- (52) 一例として次を参照。Arno Widmann, Der Kampf der Angela Merkel, in: Frankfurter Rundschau vom 17.4.2007.
- (53) エティンガーの略伝については、Landeszentrale für politische Bildung Baden-Württemberg, Porträt Günther Oettingerが参考になる。
- (54) 追悼演説でのエティンガーの動機についてはこの2説が有力だが、どちらが強かったかは別にして、彼が主張するようにリップ・サービスだけだったとは考えにくい。保守層に取り入るといふ動機を認めれば風圧が増すのは避けられないが、経済自由主義的な立場のために彼が保守層に好感をもたれていなかったことから、歩み寄る好機と考えた可能性があるからである。
- (55) ZDF-Heute vom 13.4.2007.

- (56) Die Zeit vom 17.4.2007. Tagesschau vom 17.4.2007.メルケルに対する怒りはエテ
ィンガーの地元バーデン＝ヴュルテンベルク州のCDU幹部の間で特に強かった。
Focus, Nr.17, 2007, S.24f.
- (57) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 10.9.2007; Frankfurter Rundschau vom
27.10.2007.シェーンボームのスタンスについては、Joachim Fahrn, Einer der
letzten Konservativen in der Union, in: Die Welt vom 18.1.2008.
- (58) この点に関しては、さしあたり次を参照。野田昌吾「2005年ドイツ連邦議会選挙
とメルケル大連合政権の成立」『法学雑誌』（大阪市立大学）53巻2号、2006年。
- (59) Die Welt vom 25.4.2007.
- (60) 国際舞台でのメルケルの活躍はドイツ国民の間で高い支持と共感を得ている。
Die Zeit vom 26.9.2007. なお、『フォーブス』の調査によると、政権に就いて1年程
でメルケルはアメリカのライス国務長官を抜いて「世界最強の女性」に躍り出ており、
2年後の2007年9月には「メルケルにこれまでにない好感」との見出しで、『フォ
ークス』が「かくも多くの有権者が首相としてメルケルを望んだことはかつてない」
とその高い人気に注目している。Focus vom 1.9.2006 u.12.9.2007.
- (61) メルケルのこうした側面については、移民問題での統合サミットに関連させて指
摘した。拙著『移民国としてのドイツ』木鐸社、2007年、第4章参照。
- (62) この点に関しては、拙著『統一ドイツの政治的展開』木鐸社、2004年、200頁以下
参照。
- (63) Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 13.9.2007.
- (64) これはメルケルに限らず、ドイツの政治的リーダー層の世代交代の問題として指
摘できる。この点から見ると、コール政権からシュレーダー政権への交代が世代の
入れ替わりとして大きな意義を有している。前掲拙著『統一ドイツの政治的展開』
81頁参照。
- (65) ホーマン事件の検討はここでは行うことができない。2003年10月3日のドイツ統
一記念日にホーマンが行った演説は反ユダヤ主義的だという批判を浴び、11月14日
の院内会派総会でメルケルの要請に基づき彼はCDU・CSU史上初めて除名処分を受
け、翌年7月には審査委員会の決定でCDUからも除名された。問題になった演説の
全文は、2003年11月6日付『フランクフルター・アルゲマイネ』に掲載されている。
また事件の経緯や論評に関しては、詳しい報道を続けた同紙の一連の記事が役立つ。
なお、除名問題は法廷で争われたが、2007年末に決着した。Frankfurter
Allgemeine Zeitung vom 17.12.2007.
- (66) Peter Frey, Lektion in Sachen Vergangenheit, in: ZDF-Heute vom 20.4.2007.
- (67) Michael Brenner, Die jüdische Gemeinschaft in Deutschland nach 1945, in: Aus
Politik und Zeitgeschichte, 50/2007, S.15. 併せて武井、前掲書137頁参照。

- (68) 石田勇治『過去の克服』白水社、2002年、301頁。歴代会長の中ではI.ブービスの名前がM.ヴァルザーといわゆるアウシュヴィッツ論争を展開したことで知られており、ジョルダノーは邦訳のある『第二の罪』などで馴染みがあるといえよう。
- (69) この点に関しては、次の事実を想起すれば足りよう。ライシテを国是とする隣国フランスとは異なり、緩やかな政教分離をとるドイツでは、排外暴力や貧困のような社会的モラルが問われる領域で福音主義とカトリックの両教会が社会に向けて警告やアピールを発するだけでなく、社会団体を代表する形で政策形成過程にも参加するが、そうした場合にユダヤ人中央評議会もしばしば加わることである。
- (70) Ute Frevert, *Geschichtsvergessenheit und Geschichtsversessenheit revisited*, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte*, B40-41/2003, S.6f.
- (71) Hans-Ulrich Wehler, *Oettingers Trauerrede und die Folgen*, in: *Der Spiegel* vom 18.4.2007.
- (72) *Stern* vom 14.4.2007. *Deutschlandfunk-Nachrichten* vom 14.4.2007. *Der Spiegel*, Nr.16, 2007, S.36. さらに著名な軍事史家M.メッサーシュミットは質問に答える形でエティンガーの主張に具体的に反証している。Oliver Das Gupta, *Filbinger hatte Handlungsspielraum*, in: *Süddeutsche Zeitung* vom 16.4.2007.
- (73) Harald Welzer, *Wer waren die Nazis ?*, in: *Blätter für deutsche und internationale Politik*, H.5, 2007, S.563. ただし、歴史の無知や忘却は当たっていると看做すのはステロタイプの押し付けといわねばならない。こうした把握では世代差が霞んでしまうという問題が生じよう。
- (74) Reinhard Mohr, *Nazi-Muff aus 1000 Jahren*, in: *Der Spiegel* vom 15.4.2007.
- (75) Heribert Prantl, *Wenn die Geschichte ruhen soll*, in: *Süddeutsche Zeitung* vom 17.4.2007.
- (76) これに関し、石田、前掲書および三島憲一『現代ドイツ』岩波新書、2006年、第6章参照。
- (77) Wolfram Wette, *Oettingers Entschuldigung genügt nicht*, in: *Frankfurter Rundschau* vom 21.4.2007.
- (78) *Deutschlandfunk-Nachrichten* vom 17.4.2007.
- (79) イェニンガー事件に関しては、足立邦夫『ドイツ 傷ついた風景』講談社、1992年、66頁以下のほか、鈴木康志「イェニンガー事件について」『*Litteratura*』（名古屋工業大学）16号、1995年参照。
- (80) *Deutschlandfunk-Nachrichten* vom 17.4.2007.
- (81) 一例として、マイケル・イグナティエフ、幸田敦子訳『民族はなぜ殺し合うのか』河出書房新社、1996年、142頁以下参照。

- (82) これに関しては、ワールドカップの折りの『シュピーゲル』の特集が参考になる。Der Spiegel, Nr.25, 2006. 連邦政治教育センターの週刊新聞『パーラメント』が2006年10月に「愛国心」の特集号を組み、同センターの『政治と現代史から』が2007年の最初の号で「愛国心」を特集しているのも、プチ・ナショナリズムが顕在化したことを背景にしている。なお、篠原一『市民の政治学』岩波新書、2004年、143頁以下参照。
- (83) Hans-Ulrich Wehler, Ein aufgeklärter Patriotismus: Über die Identitäten der Deutschen und die Gefahr neuer Subkulturen, in: Politische Studien, H.407, 2006, S.23f.
- (84) Heinrich August Winkler, Geschichte voller Gegensätze, in: Die Zeit vom 30.9.2006. なお、Eckhard Fuhr, Was ist des Deutschen Vaterland?, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, 1-2/2007, S.3参照。愛国心をめぐる問題状況は2006年に公刊された論集に付されたM.レスラーの序言の一文に集約されている。「前世紀の歴史的破局と自分たちの罪に照らし、ドイツ人は愛国主義的に感じたり、自分たちの歴史、文化、伝統を誇りに思っよいのだろうか。」ドイツについてのG.ファチウスの「自分自身を模索中の国」という形容はこの問いの端的な表現であろう。Matthias Rössler, Vorwort des Herausgebers, in: ders., hrsg., Einigkeit und Recht und Freiheit: Deutscher Patriotismus in Europa, Freiburg 2006, S.7. Gernot Facius, Deutschlands neues Wir-Gefühl, in: Das Parlament vom 16.10.2006.
- (85) Die Welt vom 23.4.2005. この調査については、川喜田敦子『ドイツの歴史教育』白水社、2005年、175頁でも言及されている。なお、同書66頁も併せて参照。
- (86) Die Welt vom 8.1.2008.

付記

本文を書き終えた後、興味深い報道などに接したので、以下で本文を補足する意味で二つの点に触れておきたい。一つはエティンガー自身に関することであり、もう一つは末尾で論及したプチ・ナショナリズムに関連することである。

2007年夏に上記の論考を脱稿してからエティンガーをめぐって耳目を惹くような話題はなかったが、年末になって幾分関心と呼ぶ出来事が報じられた。それは彼が長年連れ添った妻インケンと別居する事態に至ったことである¹⁴。

キリスト教社会同盟（CSU）では不祥事による引責辞任が確定しているシ

ユトイバー党首（バイエルン州首相）の後任をめぐる党内の争いが激化し、有力候補の一人としてH.ゼーホーファー連邦消費者保護・農業相の名が挙がっていたが、2007年6月にインゴルシュタットで暮らしている妻とは異なる女性との間に子供が生まれたことが明るみに出た¹²⁾。またその少し前の5月には同党幹事長で将来が有望視されるM.ゼダーに4人目の子供ができたものの、妻ではない女性が母親であることが報じられた¹³⁾。一方、CSUの姉妹政党であるキリスト教民主同盟（CDU）では12月に同党のホープと目されるC.ヴルフ・ニーダーザクセン州首相が結婚生活で破局を迎え、妻クリスティアーネと別居したことがマスコミを賑わせた¹⁴⁾。そしてこれに続いてエティンガーの別居が公式に確認されたのである。

ドイツの戦後史に輝かしい功績を残したブランドをはじめとして、その孫を自認するO.ラフォンテーヌ（元SPD党首、現在は左翼党党首）、G.シュレーダー前首相、さらにはシュレーダー政権で副首相・外相の要職にあり、多年に亘って緑の党を指導したJ.フィッシャーなどドイツでは結婚と離婚を繰り返した主要な政治家は少なくない。しかし大抵は社会民主党か緑の党の所属であり、そうした点に、個人の自由や自己実現に重きを置く両党の一種の政治文化が表出していた。これに対し、両党が進めた同性婚の公認に反対したことからも看取されるように、保守政党として伝統的価値を擁護し、とりわけ家族や結婚を重視するCDUやCSUでは結婚生活の破綻は政治家として重大な失点と見做され、離婚や別居は極力回避されてきたのが現実だった。6月20日付『ヴェルト』紙がCSUの党首選に絡め、婚外子の誕生でゼーホーファーの人气がCSU支持者の間で急落したことを伝えているのは、このことの証明といえよう。事実、緑の党や左翼党の支持者では政治家の私生活は重要ではないと支持者の半数が考えているのに対し、CDUやCSUの支持者の3分の2は政治家が規律正しい私生活を送ることはその信頼性に関わると見做していることを12月に公表されたEMNIDの世論調査は伝えている¹⁵⁾。

そうした経緯を考慮すると、CDUとCSUを代表する立場にある上記4人の政治家の家庭生活に関わるスキャンダルは、やはり見過ごすことのできない事

件であり、保守政党にも個人主義化の大きな波が押し寄せてきたことを告げているといえよう。この問題について『シュピーゲル』誌で論評したF.ヴァルターは、1960・70年代のCDUとCSUの指導者を引き合いに出し、「別居と離婚－シュトラウス、ドレックガー、フィルビンガーにはこれはおよそ考えられないことだった。しかしヴルフとエティンガーにとってはなんら問題ではない」としつつ、そこに「かつて同盟がその支えで選挙に勝利を収めてきた規範の崩壊」が見出せると指摘している。「文化革命、ヘドニズム、自由至上的なポスト・マテリアリズムに対して同盟が築いたダムが決壊した。シュトラウス、ドレックガーたちが嘲笑的に時代精神と呼んだものに対する武器をキリスト教民主主義の新しい政党エリートたちは捨て去った。キリスト教民主主義の指揮者たち自身が各々、拘束の緩められた個人性の利点を好むようになっていたのである⁶⁾。」この指摘との関連では、2007年12月初めの党大会で採択されたCDUの新綱領にある「家族の価値には献身と信頼だけでなく、パートナーと子供の個人性と発展に対する尊重も含まれる」という文言を見据えつつ、M.ラウが「かつて嘲笑的にした自己実現へのこのような譲歩は、1980年代でもなおCDUの綱領では考えられないことだったろう」と述べているのが関心を惹く⁷⁾。いずれにせよ、これらの点を踏まえれば、別居に至った一事からしても、エティンガーが衰退しつつある価値保守主義の流れに立っていないことは明白であろう。

いま一つ、プチ・ナショナリズムとの関連で最新の世論調査の結果にも言及しておきたい。

ベアテルスマン財団の委託により世論調査機関EMNIDがアメリカ、ロシア、フランス、イギリス、ドイツ、日本など9カ国でそれぞれの国の世界における役割に関する意識調査を行い、2007年10月にその報告書が公表された。その内容は全体的に極めて興味深いが、ここではドイツに絞って要点を紹介しよう。

調査は「大国」をキー・ワードにして行われたが、それが各国で有する意味とニュアンスは、無論、決して様ではない。例えばイギリスでは調査対象国をいずれも大国とする傾向が強いのに対し、反対に日本では弱いのがそのこと

を証明している。この点を考慮に入れてデータを比較対照した場合、内実が何であれ今日のドイツが大国といえるのかどうかという設問ではドイツ人の回答者の半数に当たる49%がその通りと答えている。しかし9カ国の平均ではその比率は30%であり、ギャップが大きいのが注目点になっている。またイギリス、フランスを大国だと思うのはそれぞれドイツ人の40%と41%であり、ドイツを下回っているのももう一つの注目点になっている。この数字はドイツが両国を追い越したという意識が存在することを示しているといえよう。因みに日本人で日本を大国だとするのは19%にとどまり、日本に関する9カ国平均の36%をかなり下回っているのがドイツとの顕著な対照をなしている*。

次に2020年になるとどの国が大国の地位にあるかという設問では、ドイツ人の回答は、ドイツが46%、フランスとイギリスは37%と29%であり、この面でもドイツが上回っている。これに対し9カ国平均ではドイツは25%であり、ここにもギャップが見出される。フランス人で2020年に自国が大国だと思うのは26%で平均の19%と大差がないことや、日本人で2020年に日本が大国だとするのは14%にすぎず、日本についての9カ国平均の33%を大幅に下回っていることなどを考えると、ドイツでの自己認識が過大評価に傾斜していることが看取されよう³⁹⁾。

さらに将来、世界の平和と安定のためにどの国がより大きな役割を演じるべきかという設問を見ると、ドイツ人の回答でドイツは73%ときわめて高いのが注目に値する。しかし同時に、9カ国平均ではドイツに期待するのは26%にとどまるのであり、開きが際立つ結果になっている。またイギリス、フランスについてはドイツ人で貢献を望むのは44%、57%で、自国を大きく下回っているのも注目されよう⁴⁰⁾。

ここでは調査の一部だけを取り上げたが、これらの結果を見る限り、ドイツで大国という自国認識が広く定着していることは間違いないであろう。またその場合、重心が政治、経済、文化、軍事などのどの側面にあるかは判然としなものの、自他共に認める経済大国としての実力を土台にしてイギリス、フランスを凌ぐ役割を担う国という意識が形成されていることも読み取れよう。そ

れだけに注意を要するのは、主要国でのドイツに対する認識との間にかなりの乖離が生じているとみられる点である。それは、もう一度言えば、ドイツ人の自国の過大評価とも言え直すことができよう。

この点を見るにつけても思い出されるのは、ある評論で1871年と1990年の二つのドイツ統一を比較した際の高坂正堯の直観である。彼は統一による熱気が直後に始まった経済不況で過剰な悲観主義に暗転したところに共通点があるとした上でこう記している。「1870年代から80年代の暗い雰囲気の後が良くなかった。経済発展の成果が出て、ドイツ人がそれを実感するようになったとき、社会の雰囲気は明るくなったが、それはまた自己過信に通ずるものとなった。⁹¹⁾」この言葉は、二度目の統一の後、大量の失業者に象徴される停滞の長いトンネルから抜け出たときに過剰な自信が現出するかもしれないという予感に基づくものであろう。

その予感が的中したといえるかどうかはともあれ、コールがEUをユーロの実現にまで牽引し、イラク戦争の際にシュレーダーがフランス、ロシアと連携してアメリカに反旗を翻し、地球環境問題に取り組んだ先進国サミットやEU憲法の基本条約としての蘇生などでメルケルが主導権を發揮した。これらの例にみられるように、冷戦後の国際社会において統一を果したドイツの存在感は着実に強まってきている。そうした動きがドイツ国内での大国意識につながり、プチ・ナショナリズムを強めているとしても、少しも不思議ではないであろう。けれども他方では、上述の調査から窺えるように、そうしたドイツについての国際社会での受け止め方は冷ややかであることも確かな事実だというべきであろう。東西に分断され、冷戦終結まで国際社会で経済力に照応しない地位に甘んじていたドイツは、東西分断をナチスの侵略戦争の帰結として受忍し、自国を「特殊な国」として位置づけてきた。これに対し、冷戦後のドイツは、平和裏に統一を果したことに加え、連邦軍の各地への派遣を軸にした国際貢献などで実績を積み重ねることによって「普通の国」に変貌しつつあり、「特殊な国」の意識を払拭しているように映る⁹²⁾。大国という自国認識を伝える上記の数字は、国際社会とのギャップを拡大させながら、ドイツ国内で「普通の

国」としての意識と自信が固まりつつあることを物語っているように感じられるのであり、それが下地になっていることを考えれば、ブチ・ナショナリズムが顕在化したのは決して偶然ではないと思われるのである。

注

- (1) Die Welt vom 10.12.2007. 煩雑を避けるため、スキャンダルについては『ヴェルト』紙の報道だけを挙げることにする。
- (2) Die Welt vom 15.6.2007 u.5.8.2007.
- (3) Die Welt vom 24.5.2007.
- (4) Die Welt vom 10.12.2007.
- (5) Die Welt vom 16.12.2007.
- (6) Franz Walter, Die neue Kantinen-Mentalität, in: Der Spiegel vom 10.12.2007.これと同趣旨の批評が『シュピーゲル』の記事に見られる。Der Spiegel, Nr.51,2007, S.49.
- (7) Mariam Lau, Die Union und das Problem mit der Ehe, in: Die Welt vom 16.12.2007.
- (8) Bertelsmann Stiftung, Wer regiert die Welt?, Berlin 2007, S.18f.
- (9) Ibid., S.23f.
- (10) Ibid., S.34f.
- (11) 高坂正堯『世界史の中から考える』新潮社、1996年、33頁。
- (12) 拙著『統一ドイツの政治的展開』木鐸社、2004年、第7章、中村登志哉『ドイツの安全保障政策』一芸社、2006年、159頁以下参照。